

競技会における死亡事案についての報告書

公益社団法人日本オリエンテーリング協会
会長 堀井 学
同危機管理コンプライアンス委員会
委員長 伊藤好信

はじめに

去る令和3年12月26日に開催されたWMG2021関西プレイベントにおいて、参加者の一人であるAさんが急性大動脈解離のためレース直後に不調を訴え、同日逝去されました。多くのオリエンテーリング大会に参加されてきた熱心な愛好者であったAさんを失ったことは、私たちオリエンテーリング関係者にとっても悲しい出来事ですが、ご家族の心中はお察しして余りあるものがあります。

本報告書は、Aさんのご逝去を機に、オリエンテーリング大会がより安全で、安心して参加できるものとなるよう、今回の出来事の経緯をまとめるとともに、その課題を抽出し、今後への提言を行うものです。今後本協会はもちろん、下部組織やオリエンテーリング愛好者が、オリエンテーリングの安全に向けて一層の努力をすることを望むとともに、謹んでAさんのご冥福をお祈り致します。

1. 調査と報告の目的

本調査と報告の目的は、本協会が主催する下記のオリエンテーリング競技会において死亡事案が発生したことを踏まえ、今後のより安全で安心して参加できるオリエンテーリング大会に資するため、同種の事案発生を可能な限り低減する方策を検討するために、事案の経緯の確認と課題の抽出を行い、今後可能な対応策を提言するものである。

なお、本報告書はオリエンテーリング大会全般の安全性向上のため、内容に関してご家族の了承のもとに、匿名化の上で公表するものです。

2. 事案の状況

- 1) 競技会名：WMG2021 関西プレイベント 神戸スプリント大会
- 2) 開催日：令和3（2021）年12月26日
- 3) 開催場所：神戸市垂水区 舞子公園
- 4) M45の参加者であるAさん（49歳）。

5) 大会の概要

本大会は、午前中の予選、午後の決勝方式で行われるスプリント競技の大会であった。大

会プログラム（資料 1）によると、予選のトレインとなる舞子公園及びアジュール舞子は、施設や松林、芝生広場、石畳・舗装区域、人工の砂浜からなり、アップダウンはほとんどなく、海岸に位置するため天候によっては風の影響を強く受ける可能性がある場所であった。同じく大会プログラムに記載された過去の気象情報からは、この時期の気温は、最高が概ね 9～13 度、最低が 4～9 度程度の気象条件であった(実際の気象状況については後述する)。またコース距離は M45 では 2.8km（登り 10m）であり、これは M35～M50 で同一レベルであった。実行委員会からの回答によれば、コース設定に当たっては、「車の通行するところはコースにならないようにしました。一般利用者（釣り人など）の多い海岸線の利用は避けました。」とのことであった。

6) 大会のリスクマネジメント体制について

同じく大会プログラムによれば、本大会のリスク対応の体制は以下のようなものであった。

①午前 7 時の時点で当該地域に気象警報が発令され、参加者の安全が確保できないと判断された場合は大会を中止。

②新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況によっては中止することがある。また、体調不良の方、37.5 度以上の発熱のある方は大会出場を控えることが告知された。実際の対応としては一週間前からの体温測定を行い、受付に先立ち体調確認をすることとなっていた。

③ナンバーカード（ゼッケン）には、緊急時の対応のための情報として、裏面（1 枚のみ）に氏名、住所、生年月日・緊急連絡先の氏名・住所・電話、現症（今かかっている病気）、服用中の薬、薬アレルギー、大会に参加している知人の氏名・電話番号、その他を記載する欄があった。

④参加者の留意事項として、

- ・アウトドアで行うスポーツであるため、そのリスクを十分ご理解の上ご参加ください。
- ・参加者が自分自身または第三者へ与えた事故、損傷、損害について、主催者は一切責任を負いません。主催者は傷害保険に加入しますが、補償額には限度があります。各自で体調管理に責任を持って参加してください。健康保険証の持参をお勧めします。
- ・主催者は大会中の紛失、盗難、事故などについて一切の責任を負いません。貴重品の管理は各自でお願いします。荷物預かりの予定はありません。
- ・公園内の競技なので来園者との接触は十分注意願います。
- ・未成年者は保護者の同意を得て参加してください。

が記載されていたが、上記留意事項についての参加者からの同意書等はとっていない。

7) 当日のリスクマネジメントの状況について

会場における安全管理（救護やパトロールの担当者）・危機管理体制（緊急連絡等）について、運営マニュアル等は以下のようなものであった。

- ①主要幹部の連絡先は全ての役員の名札の裏に記載されている。
- ②本部救護所には、看護師が待機し、テレイン内では、パトロール要員4名が適宜テレイン内をパトロールしていた（図表1）
- ③救護所は会場本部に設置され、当法人（以下、JOA と呼ぶ）事務局管理の救護用品セットが用意されていた。ただし、毛布やAEDなどの大型資材はその場には準備されていなかった。
- ④会場内の本部・受付・救護、更衣場所等は、強風のため、大会プログラムの記載より1ブロック南東にずらした位置に配置されていた。
- ⑤フィニッシュ地区は会場から約200m離れた位置にあった。監視係員はいたが、その場には救護用品は無かった。

12月26日(日) スプリント		7:00	7:30	8:00	9:00	10:00	11:00
救護所(看護師)				会場設営(舞子)		準備	救護(舞子)
競技関係				競技(舞子)			
設置/撤収(舞子)			設置(木製,発砲)×10	ボ確			パトロール(舞子)
設置/撤収(舞子)			コ設置	ボ確			パトロール(舞子)
設置/撤収			コ設置				パトロール(舞子)
設置/撤収			コ設置B×12(ペグハンマ)				パトロール(舞子)

図表1：救護所、パトロールタイムテーブル

8) 当日の気象状況

大会前一週間の神戸市の気象状況は図表2のとおりであり、黄色を塗った26日が大会当日である。大会時の天気は良かったものの、最高気温は6.1℃、最低気温は0.9℃と、平均を大きく下回る気温であった。風速も平均で6.6m/s、最大で10.1m/sであった。気温・風速ともに、その前の6日間と比較しても厳しさが増した日であった。

日付	気圧 (hpa)	降水量 (mm)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	平均風速 (m/s)	最大風速 (m/s)	昼(6-18時)の天気概況
20	1016.3	--	12	5.4	3.7	7.4	晴
21	1012.8	--	14.4	7.2	2.4	6.2	晴時々曇
22	1014.7	--	13.2	7.1	3.9	8.7	曇一時晴
23	1019.7	--	11.3	4.8	2.6	5.3	晴一時曇
24	1015	0.5	12.8	5.8	2	4.5	晴後曇一時雨
25	1010	0	12.5	3.5	4.4	8.3	晴後曇一時雨
26	1015.6	--	6.1	0.9	6.6	10.1	晴後一時曇

図表2：大会前一週間の神戸市の気象状況（気象庁アメダスデータによる）

9) Aさんの状況

オリエンテーリングの記録掲載サイト (<https://mulka2.com/lapcenter/>) にアップされた

大会等の成績データによれば、2012年から2021年末までの10年間のAさんのオリエンテーリング大会等参加数は372回であり、年間平均30回以上参加する競技者であった。この記録に加え、別の記録からも本大会の競技形式であるスプリント競技に積極的に取り組んでいたことがうかがえる。タイムの分析から得られる「巡航スピード」（ミスをしない場合に概ねトップの何%ぐらいのタイムで走っているかを表す指標）では、この期間の平均値は148%（トップの走行スピードの約1.5倍）であった。

コロナ対策のための大会当日の体調申告（オンライン）によれば、Aさん自身の記載（12月26日7:02:38時点）で、12/26(日)の体温：36.5、大会直前2週間における体調不良等に関する項目等への回答は、いずれも「無」であった。

10:44 指定されたスタート時刻に予定通りスタートした。

前述の大会記録サイトにアップロードされた記録から、17番コントロールまではトップのタイム11分13秒に対して13分44秒であった。その後、17番から18番に至るまでにはトップが2分24秒のところを13分43秒かかっている。また、19番から21番まではさほど遠回りではないにも関わらず不通過で、最終コントロールのみをパンチし、18番からはトップが1分45秒程度のところを約3分52秒でフィニッシュしている。

以上のことから、17番コントロールまでは普通に競技ができていたと思われるが、17番以後に何らかの異変が生じ、18番コントロールはパンチしたものの、その後競技を断念させる程度の異変が発生したと強く推認される。

11:15頃 歩いてフィニッシュする姿がフィニッシュ計時のバックアップ映像に記録されている。記録からするとフィニッシュ時刻は11時15分19秒であった。大会プログラムの記載によれば、フィニッシュ地区から本部のある場所まで5分程度の距離であるが、記録によれば11時19分17秒に、本部で記録の読み取りを行っている。

11:25頃 会場内で動けなくなっていると、他の競技者からの連絡があった。B氏（競技責任者・医師）とC氏（救護所看護師）が様子を確認に行った。Aさんは臥床しており、その時には意識があり、名前・場所についての応答は可能であった。「足が動かない」等との訴えがあった。B氏は低体温を疑い、コートで体を覆って数分経過観察したが改善なく、体動も困難であった。「胸も少し痛い」との訴えがあったことから、11:33分に救急車をコールした。

搬送された病院の記録によれば、11:41に救急車は会場に到着し、担架で搬送。C氏が救急車に同乗し、11時45分に出発した。救急車上では、保温と酸素投与を継続しながら搬送した。下肢の脱力感は継続した。またレース途中で心臓の痛む感じと、ピキッという感じがあったという訴えがあった。



図表 3 : M45 のコース図

10) 搬送後の状況

Aさんは、神戸市須磨区のJ病院に救急搬送された。その後、搬送に付き添ったC氏よりB氏に、病院の医師から聞いた病状と亡くなられた旨の連絡があった。後日の病院からご家族への説明によれば、12:10に病院到着後、エコーで心臓の周りの出血を確認し、CTを撮りに行くが、CT検査中に心肺停止となり、心肺蘇生を試みるも13:00に亡くなられた。死因は「急性大動脈解離を原因とする大動脈破裂」とのことであった。

病院が、ご家族に至急連絡を取りたいとのことで、病院と相談し、実行委員会から警察に連絡することと並行して、会場にいた他の参加者からの情報で職業が判明し、勤務先に電話を入れたが休日で不在であった。Aさんの知り合いである大会実行委員長D氏が知人のつてをたどり連絡を試みたが、ご家族の連絡先は把握できず。警察に任せることとした。

その後、警察からご家族と連絡がついたとの連絡があった。それにより、ご家族は27日にJ病院に向かわれることとなった。12月27日に大会実行委員会副会長E氏がJ病院に伺い、ご家族の方に面談することができ、状況説明を行った。スタッフの対応には感謝されていたとのことだった。

11) 疾患について

大動脈解離については日本循環器学会/日本心臓血管外科学会/日本胸部外科学会/日本血

管外科学会が合同で作成したガイドラインがあり、2020年に改訂版が公開されている。

(https://www.j-circ.or.jp/cms/wp-content/uploads/2020/07/JCS2020_Ogino.pdf)

それによれば、「大半の症例で発症時に胸部・背部に激痛を訴え、過去に経験したことの強い疼痛と表現されることが多い。性状は鋭く引き裂かれるような痛みであり、突然発症が特徴的である。A型解離では前胸部痛、B型解離では背部痛や腹痛が特徴的である。また、痛みは解離部位の拡大とともに移動したり、逆に解離の進展が止まると一時的に疼痛が消退することもある。一方で、急性大動脈解離の6%程度は無痛性である。」また、病院着前死亡は61.4%に及び、93%が24時間以内に死亡しており、真の救命率は著しく低いとの記載もある。

「大動脈解離の発症メカニズムは、劣化して脆弱になった大動脈の壁に血行力学的な力が加わることによる。」「その原因は高血圧やマルファン症候群などの先天的な遺伝性疾患などである。」「大動脈解離の危険因子としては、太い大動脈径、身体的・精神的ストレス、高血圧、睡眠障害であり、発症時間帯は冬期、午前中が多い」とされている。

12)組織内での情報共有と対応の状況

当日大会スタッフにはAさんが亡くなられたことのみが共有された。スタッフが解散してから夕方17時01分に、大会実行委員長D氏から電話があり、ご家族と連絡がついたこと、明日、神戸においでになることが、B氏と共有された。それ以降、以下のような経緯で情報の共有がなされた。

12月27日(6:43) B氏より、JOA事務局長F氏、危機管理・コンプライアンス委員会委員でもある副会長G氏、業務執行理事H氏あて、事案発生とそれまでの経緯についての簡単な報告があった。

12月27日(23:10) B氏より関係者に補足の報告があった。

12月28日(17:41) オリエンティアML(メーリングリスト)へ大会役員I氏から、逝去と告別式の告知がなされた。

12月28日(19:54) B氏よりJOA理事MLに報告があった。

12月31日(8:45) B氏より危機管理・コンプライアンス委員会あて報告メールがあった。

1月3日 大会における死亡事例の報告(ウェブによる第一報)を公開した。

1月6日 Aさんの葬儀が行われ、大会実行委員長D氏と大会役員I氏が参列した。

1月12日(21:00～) 危機管理・コンプライアンス委員会を開催、調査および記録の保存、再発防止等に関する提言をまとめることとした。

3. 課題の抽出

今後の同種の事案発生の減少、その他の身体的なリスクに伴う事案の減少を図るため、以下の観点から、課題の抽出を行った。

- ①大会のリスクについての情報提供（リスクコミュニケーション）
- ②競技特性（スプリント競技）による安全管理
- ③会場における安全管理・危機管理体制（緊急連絡）
- ④事案発生後の対応
- ⑤組織としての事案への対応状況

①大会のリスクについての情報提供（リスクコミュニケーション）

募集要項による周知、プログラム等による大会リスクの周知の状況は2.に記載した通りであった。JOAが発行した「ナビゲーションスポーツのための安全ガイド 2019 改訂 4版」（資料3。以下「安全ガイド」と呼ぶ）によれば、オリエンテーリングは、1) 体力的要求のきびしいスポーツである。2) 予測できない危険性が多い。3) 単独行動である。観客がいない。4) 事故現場への交通手段、連絡手段に限られる、というオリエンテーリング特有のリスク要因が指摘され、「潜在的には大きなリスクを抱えるスポーツである」と指摘がある。

スプリント競技は、フォレスト競技での大会に比べて2)～4)に関してリスクを累加させる状況にはないと考えられ、一般的なオリエンテーリング競技者／主催者の認識も同様であったと思われる。この点を鑑みると、要項や大会プログラムにおける本大会でのリスク情報の提供は、一般的なオリエンテーリング大会と同程度のものであったと言える。ただし、スプリント競技は、その競技特性によって身体負荷が高いことが推測される。これについては②で触れる。

また、「アウトドアで行うスポーツであるため、そのリスクを十分ご理解の上ご参加ください」旨の記載が要項には記載されており、同意書の提出は求めているものの、それに同意して申し込むことが前提となっていた。

②競技特性（スプリント競技）に対する安全管理

大会参加者以外の滞在者がいる公園での実施であることから、コース設定においては、車の通行、釣り人・通行者とのコンフリクトの発生が最小限になるような配慮が行われていた。この点からは、スプリント競技特有のリスクに対するマネジメントは概ね確実に行われていたと考えられる。

一方で、スプリント競技は競技時間が短く、比較的管理された空間で実施されるため、フォレスト競技に対して安全度が高く、大げがもしないという認識があったことが推認される。実際には、スプリント競技は、公園等のトレインで短時間で行われる競技であり、走行スピードも速く、身体的負荷はフォレスト競技よりも大きなことも想定される。特に冬場に全力疾走をすることによる生理的なリスクについては、フォレスト競技とは別種の注意を必要とする可能性があるが、そのリスク認識は、実行委員会および参加者の中でも十分ではなかった可能性がある。

③会場における安全管理・危機管理体制（緊急連絡）

実行委員会からの回答によれば、当日の天候状況によって配置の変更はあったものの、大会プログラムに記載されている通りのレイアウトがなされ、救護所も含めて必要な部署は確実に設置されていたと考えられる。また、救護所には看護師が配置され、テレイン内での安全確保のパトロールも適切に配置されていた。

救護所には「安全ガイド」（p.30）に基づく救急用品が設置されていたが、毛布（防寒用品）と AED の配置はなかった。ただし、本事案においては、A さんは救急車で搬送されるまで意識はあり、AED の使用が必要な状況ではなかった。

④事案発生後の対応

A さんは、途中棄権で歩きながらフィニッシュしたのが 11:15 頃で、約 10 分後には、動けなくなっていることが、他の競技者からの連絡により本部の知るところとなった。医師である B 氏と看護師である C 氏により体調の把握が行われた。当初は「脚が動かない」との訴えがあったものの、数分後「胸も少し痛い」とのことから、本部の把握から 8 分程度で救急要請がなされ、11:45 分には C 氏の同乗のもとで、救急車にて病院への搬送が行われた。第三者である循環器専門医の見解でも、この間の対応は適切に行われたと考えられる。

なお、逝去後に速やかにご家族と連絡を取れなかった。これはナンバーカード裏の緊急連絡先欄には本人の携帯番号が書かれていたのみであり、緊急連絡先確認手段として機能しなかったためである。ナンバーカード裏の緊急連絡先等の情報は、個人情報の管理の点から、緊急時の対応という点からもよい工夫であったが、それを機能させるためには参加者の協力が欠かせない。この点についての周知に課題があったと言える。

⑤組織としての事案への対応状況

JOA の危機管理マニュアルによれば、本事案は（3）健康危機の④その他に該当すると考えられる。またクライシスレベルとしては、レベル 1（影響が本協会内にとどまるもの）だと見なしうる。レベル 1 のクライシスについては、第一発見者から事務局長・広報担当への情報共有がただちに行われ、情報収集や情報公開レベルの把握が 1 日以内に行われることとなっている。またレベル 1 の情報公開レベルは「ウェブサイト上で公開」となっている。また、外部向けアクションとしては、初動段階では、①初動メディア対応、②被害者へのケアと誠実な対応、が指摘されている。

この観点からすると、公式な初動レベルでの主要役職者間での共有は翌朝であり、著しく遅滞したものではなかった。一方、その後の情報共有・対応の協議、外部への発信といった点で、組織的な対応が不十分であったことが認められる。特に、組織として本事案に関する広報が遅れたため、結果として公式発表の前に大会関係者から、私的な ML への発信が個人名義とは言え行われた点から、今後の危機管理マニュアルの周知と活用が求められる。

一方、ご家族には、翌日の病院でも副実行委員長からも挨拶を行い、実行委員長が葬儀にも参列するなど、丁寧な対応が行われたと考えられる。

4. より安心して参加できる大会開催に向けて

今回の事案である大動脈解離は、高血圧などの危険因子が指摘されているものの、一般的には前兆がなく、参加者自身にとっても発症の予測も救命も困難である。このような急変をもたらす循環器系疾患をはじめとする内因性の疾患の発生確率を減らす方法は、参加者自身による日常的な健康管理と体調に合わせた参加、組織としてそれを促進するための啓発に限定されざるを得ない。その際、運動に伴って起こりうるさまざまな疾病の危険因子などについての情報提供を行ってゆくことも有用だと考えられる。

一方、本事案からは、参加者がより安心して参加できる大会運営に向けての、オリエンテーリング大会一般にも通じる課題を抽出することができる。以下では、3. で抽出した課題に対応して、提言する。

なお、以下の提言での文末表現はそれぞれ以下を意味する。

「すべきである」：当該事項が当協会によって実施されることが一般的なガバナンス上も必要である

「努力すべきである」：当該事項が他の主体によって実施されるよう、当協会が働きかけることが一般的なガバナンス上も必要である

「望ましい」：当該事項が実施されることが必須とまではいえないが、安全性向上のために実効性があるため、実施することが強く推奨されること。

「考えられる」：実施すべき事項の1事例としての提言。

1) 大会のリスクについての情報提供（リスクコミュニケーション）

① 具体的なリスクの周知

大会において想定される具体的リスクを参加者・主催者が理解することは重要である。主催者が理解することで、適切なリスクマネジメントが行われる。また参加者が理解することで、現場でのリスクがより適切にコントロールできる。そのためにも、JOAは主催者・登録者に対してオリエンテーリングのリスクについて適切に周知すべきであるとともに、大会主催者は要項やプログラムで、適切にオリエンテーリングの一般的リスクや大会特有のリスクについて周知するよう努めるべきである。各大会主催者の負担を軽減するという点から、JOAがひな形となるリスク周知についての書式をフォレスト競技とスプリント競技に分けて用意することも考えられる。

日本において、オリエンテーリングは四季を通じて行われているが、持久走的な競技であることから、薄手の競技用ウェアで出走する参加者も多い。これまでも寒冷期には低体温症を疑わせる事例があった。悪天候時に開催を中止するなどの対応を採ることでこうした事例は近年発生していないものの、寒冷状況下で競技するリスクとその対処法については、十

分な周知を行うべきである。

②リスク認識の啓発・研修等：啓発シート（1枚もの程度）の作成

JOAでは2013年に「安全ガイド」を作成し、その後も改定を続け、最新の知見や考え方の普及を図っている。これはスポーツ庁の「ここスポ」サイトの「安心・安全対策リスト」にも取り上げられている。こうした大部の資料は運営者にとって有用であるが、一般のオリエンテアには周知されているとはいいいがたい。オリエンテーリングに内在するリスクの特徴や具体的なリスクについて、研修等を通じて周知を図ることが望ましい。

その際、「安全ガイド」の内容を参考に、オリエンテーリングのリスクの特性や具体的なリスク、その対応方法などを簡便に記したリーフレットなどを作成し、特に、学生や高校生、新規に始めた社会人などに対して配布し、啓発と意識向上を図ることが考えられる。

③イベントにおけるリスクの説明と同意書の導入

リスクを伴うスポーツでは、参加者に対してリスク等を説明し、参加同意書をとることが一般化している。オリエンテーリングでも、最近では参加同意書をとることが普及しつつある。日本の法理の下では、参加同意書は主催者の責任を免責するものではないが、リスク等の説明に加えて同意書を得ることで、参加者が大会参加に伴うリスクに対する意識を高める効果が期待できる。リスクの周知内容と合わせて、JOAが同意書のひな形を用意することが望ましい。

同意書の確実な取得はオリエンテーリング大会の省力化された運営になじまない側面もあるが、普及に伴いスポーツにおけるリスクに対して、様々な認識を持つ参加者がいることを踏まえると、同意書の取得を進めることが望ましい。

2) 競技トレインの安全性の確保

オリエンテーリングは様々な環境の中で行われている。競技性の高い大会では、ほぼ網羅的に調査される地図が使われるので、トレイン内のリスクの大部分は主催者により把握され、また地図にも記載されている。しかし、トレイルランニングなどと違ってトレイン内を競技者自身が自由にルートを選んで通過するオリエンテーリングでは、運営者が把握していなかったリスクに競技者が出遭うこともあり得る。こうした点からも、競技者が不意に出遭うようなリスクや、競技者が大会中自分の力では回避できないリスクについては、それを可能な限り排除し、競技者に十分周知するように努力すべきである。

特に悪天候時に過酷な条件となる場所（今回のように風に晒されやすい海浜や、気象の影響を受けやすい標高の高いトレイン等）、発生したトラブルに対しての救護活動がしにくい場所（車道から隔離されているトレイン等）などを利用する際には、開催時期の選択等において慎重になるとともに、利用する必要性がある場合には、十分なリスク管理やダメージの低減策を講じ、参加者にそのリスクを伝え、参加者側でも可能なリスク低減策をとることを

促す努力をすべきである。

3) 競技特性（スプリント競技）による安全管理

スプリント競技は、公園など比較的管理された環境で実施されているため、フォレスト競技に比べてリスクが少ないと見られやすいし、運営者側からもリスク管理上安易に受け取られがちである。一方、課題で指摘したように、運動生理学的にも負荷はフォレスト競技よりも高いことも推測される。また、他の利用者や通行者のいる場所で開催されることや、車の通る市街地で開催されることもあり、フォレスト競技とは異なるリスク源がある。1)とも重複するが、参加者以外のエリア利用者とのトラブルや事故、交通事故など、スプリント競技特有の安全上の課題について、組織、主催者、参加者が十分把握し、特に主催者がリスク低減策を実施するように努力すべきである。

現状の「安全ガイド」の記述はフォレスト競技が中心なので、スプリント競技に関する章を追加することも考えられる。

4) 会場における安全管理・危機管理体制（緊急連絡）

「安全ガイド」には、救急用品（リスト）の配備や医療従事者等の配置が提言されているが、実際の大会でそれらが確実に実施されているかの実態については、不明である。競技規則上も安全に関して言及されている箇所があるが、フィニッシュ地区の救護所の設置と救護担当のスタッフ常駐に関する条文に限られている。競技規則の付録やガイドラインなどの位置づけで、安全確保のために大会開催上考慮すべき内容を記載し、全日本・公認大会クラスの競技会では、それらが確実に実施されるように努力すべきである。

致死性の不整脈についてはAEDが有効である。AEDについては、日本救急医療財団により適正配置に関するガイドラインが出されている

(<https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000748008.pdf>)。それによれば、リスクの高いスポーツが行われる際、救助隊到着までに時間を要する場所では、AEDの設置効果が高いとされている。また設置を推奨される場所としてスポーツ施設が例示されている。特に致死性の不整脈は多くの場合フィニッシュ直前かフィニッシュ直後に発生することからも、各大会においてフィニッシュ地点に救護スタッフ、AEDを準備することが望ましい。また、フィニッシュ前後の参加者の様子を観察し、必要に応じて声をかけて処置することで救命率を上げることができる。救護スタッフがAEDの使い方を含めた一次救命の訓練を受けたり、こうした対応を意識することが望ましい。

発生後の対応のシミュレーションも事前に行っておくことが望ましい。特に公園などで施設設置のAED等の機器を利用する場合には、シミュレーションを行い手順や所要時間の確認を行う等、緊急時の対応について、事前に十分検討することが望ましい。これについても4)の競技規則の付録などに記載することが考えられる。

なお、オリエンテーリングで発生しやすい捻挫や骨折、皮膚の損傷は、開放性骨折以外で

は多くの場合緊急性はない。地元地域に負担を掛けない意味でも、救急車要請は慎重にする配慮も必要である。

5) 事案発生後の対応

事案そのものへの対応については、本事案だけでなくこれまでの多くの重大なケガに対して現場の努力により適切な対応がなされてきたと推認されるが、連絡体制については課題があったという報告は散見されている。①運営組織内の緊急連絡体制、②参加者の親族等への緊急連絡の方法、などについては、確実に行える体制を整えるべきである。これらについても、4)に記載したように競技規則の付録などに盛り込むことが望ましい。

6) 組織としての事案への対応状況

JOA が制定している危機管理マニュアル（資料②）について、特に役職者・事務局内で周知を図るとともに、想定される典型的なケースごとにシミュレーションを行い、危機管理マニュアルの有効性を検証すべきである。

7) 参加者に向けての啓発

自然の中で一人で行動することが多いオリエンテーリングでは、参加者の行動はリスク対応への最後の砦となる。その観点から、参加者には以下のようなリスク対応行動が望まれる。そのために、組織や所属集団による不断の啓発・教育が行われるべきである。

① リスクを知ること

自然という不確実性の高い環境での競技であり、エリア内の全てのリスクが主催者によって必ずしも把握されていないこと、その中で多くの場合一人で行動すること、行動中はリスクに対応するリソースが少なく、暑さ・寒さ・降水・降雪などの環境による影響が大きいこと、運動生理学的にも高い負荷の競技であること、などはオリエンテーリングの競技特性として競技者全てが意識するようになることが望ましい。

② リスクに対応すること

上記リスクを踏まえて、参加者が、日頃からの健康管理や体調に合わせた参加やクラスを選択、ウォームアップやクールダウンの励行、ウェアや装備の適切化等、リスクに対応した行動を行うよう啓発の努力をすべきである。今回の事例のように、レース中に発症した致命的な病気に関しては、救護で対応できることは残念ながら限定的である。事態を未然に防ぐためにも、競技者が自分自身の体調を踏まえて参加し、競技を行うことができるよう、具体的留意点を周知することが望ましい。

③オリエンテーリングのリスクについて、近親者ともコミュニケーションを行い、理解してもらうよう啓発の努力をすべきである。

資料

①大会プログラム

②JOA 危機管理マニュアル

https://www.orienteering.or.jp/archive/rule/risk_management_20220228.pdf

③ナビゲーションスポーツのための安全ガイド

https://www.orienteering.or.jp/archive/JOA_safety_manual2019ver.4.pdf